異説御伽噺　「人魚姫」

神田白兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異説御伽噺　「人魚姫」

【Ｎコード】
Ｎ０７９９Ｋ

【作者名】
神田白兎

【あらすじ】
人間に憧れる人魚姫が出会ったのは、優しい王子と、王子を想う親友の騎士。人魚姫は、王子に会いたいの一心で、声を代償に人間になりますが……。異説「人魚姫」、開幕。

その日の海は、突然の嵐でひどく荒れていました。
「誰か！　誰か来てくれ！　王子が海に！！」
今にもひっくり返りそうな船で、王子の護衛の騎士が叫びました。彼は、誤って海に落ちた王子を助けようと、自分も海に身を投げようとするのを、他の騎士や船員に羽交い絞めにされ、止められていました。
「やめろ！　この波じゃ無理だ！」
「離せ！　王子を守るのが、俺の役目だ！！」
仲間と揉め合う船をひとしきり眺めて、人魚姫はトプンと海に潜りました。
そして、海底へとゆっくり沈んでゆく王子を引き揚げました。
これが、始まりでした。

美しいと名高い人魚の姫。六人姉妹の末の姫は、その中でも格段に美しいと評判でした。
けれど末の人魚姫は、自分のことを、いいえ、人魚というものを美しいとは思っていませんでした。
人魚姫にとって美しいのは、煌めく鱗をもった魚の尾ではなく、すらりとしなやかに伸びた二本の足。人魚姫は、人間という生き物に強く強く憧れていました。
自分たちと一部は同じ姿をしているのに、生きる世界も生き方もまるで違う存在が、人魚姫には気になって仕方ありません。十八歳になるまで、地上に出ることは許されない人魚姫は、人間の生活をよく姉たちに聞きせがりました。
そうしてやっと、十八歳になった人魚姫は、深い深い海の底から浮き上がり、焦がれた人間の世界を目にしました。
人魚姫が見たのは、大きな船の上のパーティー。たくさんのラン

プで照らされた船上には、色鮮やかなドレスや宝石で身を飾った人間達。
人魚姫は、自分が想像していた以上の美しさに、時間を忘れてそのパーティーに見惚れていました。
しかし、いきなり月に陰りが見えたかと思えば、瞬く間に滝のような雨が降り、波が高く上がり、遠くで稲妻が落ちました。水夫たちは慌てて、帆をたたみ、パーティーの客たちの船室に駆け込みますが、波に弄ばれ大きく揺れる船から人間が一人、海に落ちてしまいました。
「王子！！」
護衛の騎士が手を伸ばしましたが、その手は届かず、王子は真っ暗な海に沈んで行きました。
騎士は、王子が見えなくなっても、仲間に取り押さえられても、王子の名を呼び続けました。ひどい雨と風の中でもその悲痛な声は、悲しいほどに響きました。
人魚姫は、海に潜り、王子を探しました。人間に姿を見せてはいけないという掟など、すっかり忘れて。
人魚姫は海底に沈みつつある王子を引き揚げ、陸地を目指して泳ぎました。
泳ぎ着いた浜辺に王子を横たえましたが、王子は目を閉じたまま動きません。
人魚姫は王子の体をさすって暖め、助かって、生き延びてと願い続けました。夜が明け、少しずつ周囲が明るくなってき始めた時、王子はかすかに動き、人魚姫がほっと一息ついてすぐ、鐘の音が響きました。浜辺のすぐそばにある、寺院の鐘でした。
少しずつ騒がしくなってくる周囲に気付き、人魚姫はやっと掟を思い出して、慌てて海に戻りました。そして、海の中から遠くで、王子を見守りました。
寺院から出てきたらしい娘が、浜辺の王子に気付き、彼女が王子を助け起して、寺院に連れていくまでずっと……

それからというもの、人魚姫は王子のことが気になってしょうがありません。
あの王子は無事、助かったのだろうか？　国に帰れたのだろうか？　と、海の底でいつでもぼんやり、そんなことばかり考えていました。人魚姫が、王子に会いたいと真摯に願うようになるまで、時間はそうかかりませんでした。
しかし、掟を破り、人間に会うなど許されるわけもないと同時に、この魚を尾を見て恐れられたら……と考えるだけで、人魚姫は悲しくてたまりません。姉達にも相談できない人魚姫は、悩み、考え抜いた末に、海藻の森にすむ魔女の元へ、相談に行きました。
「簡単なことさ。お前が人間になればいい」
魔女はいとも簡単に答えました。
「お前がその美しい尾を捨てて、二本の足を得ればいいだけさ。そうすれば、人魚の掟は関係ない。恐れられることもない」
純粋な人魚姫は納得して、自分を人間にしてくれと魔女に頼みました。
「構わないよ。ただ、その尾を無理やり二つに分けて、鱗をはがして、人間の足にするんだ。それは、ナイフで切り裂かれるよりも痛むだろうね。そうやって出来た足は、歩くたびに針の上を歩くように痛むだろう。それでも、足が欲しいのかい？」
人魚姫は魔女の脅しに負けず、真剣な面持ちでうなずきます。
「言っておくが、一度人間になれば、二度と人魚には戻れないよ。それに、人間になるといっても、所詮仮そめだ。本当に人間になるには、お前の愛している者と結ばれて、永遠の愛を誓わなくてはいけない。それができず、愛する者に裏切られた時、お前は海の泡になってしまうよ」
さすがにその言葉には、人魚姫も顔を青ざめて、しばし迷いました。でも、やはり王子に会いたくて仕方がない気持ちが収まりません。

「覚悟の上です」
人魚姫の言葉に、魔女は高らかに笑いました。
「まだ、条件はあるよ。お前を人間にしてやってもいいが、その代わり、お前の声を私におくれ。お前のその美しい声を、歌声をくれたら、お前を人間にしてやろう」
人魚姫はもう一切の迷いを見せず、魔女に自分の声を、舌を差し出しました。
「よし、いいだろう。じゃあ、この薬をお飲み。この薬を飲めば、お前は人間さ」

目が覚めると人魚姫は、浜辺に打ち上げられていました。そしてその目の前には、家族を、魚の尾を、声を失ってまで会いたかった王子と、船の上で叫んでいた護衛の騎士がいました。
「大丈夫かい？」
王子と騎士は人魚姫に尋ねますが、声を失った人魚姫は答えることができません。ただ、涙が出るほど痛む足に、顔をしかめていると、王子たちはますます心配になったらしく、二人は人魚姫を城に連れて帰ることに決めました。
城に連れて帰って、何故浜辺で倒れていたかを尋ねても、人魚姫は全く答えないので、王子は困惑しましたが、しばらくして彼女は口がきけないことを知り、歩く時はいつもひどくふらついていたので、口と足が不自由で、そのせいで捨てられた哀れな娘だと思い、王子は人魚姫を城に置いてやることに決めました。
家臣達は、身元も知れない小娘を城に置くことを猛反対しましたが、王子は聞こえないふりをしてやり過ごしました。
「良かったな。王子は優しいから、良くしてもらえるよ。それにお前は、王子を助けてくれた人とよく似ているそうだしな」
王子と常にともにいる、王子に親友でもある騎士は、人魚姫にそう言ってくれました。人魚姫は、王子が自分のことを覚えていてくれていると思い、とても喜びました。けれど、それは違っていまし

た。
「私の好きな人は、私が海でおぼれ、浜辺に打ち上げられていた時助けてくれた、寺院の娘なんだ。私は彼女を、心から愛しているけれど、彼女は神に仕える身だから、私の想いは届かないんだよ」
王子は、寂しげな顔で人魚姫に語り、騎士は王子を慰めました。そのたび、人魚姫は助けたのは自分だと叫びたかったけれど、声を失った人魚姫はただ、悲しげな顔をするだけ。
決して思いの届かぬ人に焦がれる王子を見て、騎士と人魚姫はよく幸せにしてやりたいと語りました。声がなくても、何故か人魚姫の言いたいことはなんとなく、騎士には伝わりました。
王子の為という気持ちの純粋さは、きっと二人とも同じくらいだったからでしょう。

ある日、王子に縁談がやってきました。心から愛する人がいる王子には、興味のない話でしたが、その縁談の相手を知り、驚きました。
相手は、自分を助けてくれた、神につかえているはずの寺院の娘。彼女は実は、行儀見習いの為に寺院に預けられていた、由緒正しいお姫様でした。
王子は叶わないと思っていた願いが叶ったことに、飛び上がらんばかりに喜んで、親友の騎士と人魚姫に、喜びを伝えました。
騎士は親友が結婚してしまうことに少し複雑な思いを持ちながらも、祝福してくれましたが、人魚姫は強いショックを受けて、その場から立ち去ってしまいました。
家族を捨て、声を失い、歩くたびの激痛に耐えてまで、王子に会いに来たのに、王子は自分とは結ばれない。王子に裏切られ、海の泡になってしまうことが、人魚姫は悲しくてたまりません。
いくら悲しんでも、人魚姫は王子の結婚をやめさせることなどできません。
王子と姫の結婚式は、船の上で行われました。

人魚姫は少しさびしそうな騎士の隣で、幸せそうな王子と姫を見ていましたが、我慢が出来なくなり、パーティーを抜け出して、一人で甲板にたたずみました。
波をぼんやりと眺め、ぽたぽた海に涙を落としていると、思いがけないことに海から五人の姉が顔を出しました。しかし五人の姉は、とても長くて美しい髪をしていたはずなのに、今は皆とても短く刈られていたのです。
「あぁ、探したわよ、可愛い妹。
貴女が元の人魚に戻れる方法を、私たちの髪を代償に、魔女から教えてもらいました。日が昇るまでに、このナイフで貴女の愛する人の心臓を貫きなさい。その心臓から滴る血が、貴女の足にかかれば、貴女は人魚に戻れます」
人魚姫は躊躇いましたが、姉達は人魚姫がいなくなってどれほど心配したかを語り、人魚姫を説得しました。人魚姫は泣きながら、姉達からナイフをもらい、寝静まった船室、王子と姫の部屋にこっそり忍び込みました。
美しい姫を固く抱きしめ、幸せそうに眠る王子にまた心は躊躇しますが、人魚姫は心に決めて、大きくナイフを振りかぶった時……
「誰だ！！」
騎士に気付かれて、見つかってしまいました。
ナイフを王子に向かって振りかぶった人魚姫を見て、騎士はひどく傷つけられたような、悲しい顔で人魚姫を見ました。
人魚姫も、全く同じ顔をしました。彼女は、ナイフを落とし、そのまま泣いて、走り去りました。
「待ってくれ！」
騎士が叫びますが、人魚姫は騎士の顔を見る資格もないと思い詰め、そのまま、海に身を投げました。
（ごめんなさい……、王子様、姉さん達、そして――）

「なんてことをするんだ！　この馬鹿！！」
気が付いてすぐ、人魚姫は叱られました。
朝日が差す船の上で、びしょぬれで、今にも泣き出しそうな騎士に。
人魚姫は何故、自分が海に泡になっていないことが理解できないまま、騎士からの叱責を聞いていました。
「王子が結婚するのがショックで、寂しいのはわかってる！　でも、お前が死んでどうする！？　お前までいなくなったら、俺は本当に一人きりになるじゃないか！！」
騎士はそう言って、人魚姫を強く抱きしめました。騎士に抱きしめられた時、人魚姫の心は、今まで感じたことがないくらい温かく、心地よいもので満たされました。
（……あぁ、そうか。私はずっと、勘違いをしていたんだ）
人魚姫は王子のことは好きでしたが、愛していたのは、恋焦がれていたのは王子ではなく、常に彼の傍らにいた、騎士の方でした。
自分の危険を顧みず、王子を救おうと、海に飛び込もうとしていた彼を見た時からずっと、人魚姫は彼を想っていました。
王子を助けたのは、騎士の為。王子に会いたかったのは、王子の側には絶対、彼がいるから。王子を助けたのは自分だと言いたかったのは、王子ではなく、騎士に知ってもらって、騎士に褒められたかったから。王子の結婚がショックだったのは、喜ぶと思っていた騎士が辛そうだったから。
人魚姫が海の泡になっていないのは、まだ彼女は愛する者に裏切られてなどいないから。
人魚姫は騎士の背に自分の腕をまわして、抱き返しました。
人魚姫の恋路は、始まったばかり。

（後書き）

異説御伽噺シリーズ第七弾。アンデルセンに手を出してみました。
人魚姫のハッピーエンドは、リトル・マーメイドで完膚なきまでに出来上がっているので、なんとか別パターンのハッピーエンドはないかと模索した結果、こんな話に。

最後まで読んでくださって、ありがとうございます。
もしよろしければ、感想もお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0799k/

異説御伽噺　「人魚姫」

2010年10月8日14時23分発行